

# 草庵仏教

第232号  
(発行日)

2009年10月1日

発行所：真宗大谷派念佛寺

〒6638113 西宮市

甲子園口2丁目7-20

電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.e

onet.ne.jp

http://www.eonet.ne.jp/~souan/

## 《 開法会ご案内 》

○ 〈同朋の会〉

毎月22日午後2時

○ 〈念仏座談会〉

毎月2日および12日

午後3時より。

○ 聖典共学会 --- 毎月6日。

午後7時より。

\* 8月22日同朋の会および8

月12日念仏座談会は休みます

## 心の中の壁を破る

仏教では〈迷いの心〉とい  
うのは、**自己分別の心**である  
と伝統的に言われてきた。

自己分別の心というのは自分  
と自分以外(世界と他者など)  
とを分ける心のことである  
が、それが**実生活の感覚**にお  
いては**憂苦**として感じられて  
くる。

自己分別の意識、いわゆる  
自己分離の意識(セパレーシ  
ョン感覚)は、それが強くな  
ると、自分と世界(自然や人)  
との間に意識の壁ができ、深  
い孤立感や孤独感、あるいは  
生活のリアル感の喪失となっ  
て現れる。

この孤立感、**寂寥感**に人  
はたえられない。だからまず  
は、身近な人からの愛情に慰  
めを求める。最も身近には親  
の愛情であるが、親が愛情を  
そそいでくれていると感じて  
いる場合は、この苦しみは緩  
和されるであろうが、もしも  
親からの愛情を感じることが  
乏しいと、親への不信感が生

まれ、さらなる孤立感、孤独  
感となる。

自己分離意識からの孤独感  
は、親や夫や妻、子供や友達  
からの愛情によって緩和しえ  
ても、根本的な孤立感はなく  
ならない。自己分離感覚の壁  
による孤独感**は根が深いので**  
ある。

このような自己分離感覚  
は、自分と世界(自然、他者)  
の間における目に見えない心  
の壁であり、世間の何ものに  
よっても埋めることのできな  
いような淋しきとして、日常  
の生活感情にまでなつてく  
る。

こういう意識の壁は、昔の  
ような大家族のかつ村落共同  
体的生活の一員として生きる  
ことができな**い現代**のような  
時代では、**経済中心**の社会と  
いう要素にも影響されて、現  
代人の精神状況にますます食  
い込んで**きている**のではな**か**  
ろうか。

私が仏教を求めざるをえな

くなった理由は、高  
校時代にこのセパレ  
ーション感覚に非常  
に悩まされたからで  
ある。自分と世界の  
間に透明なガラスの

ような心の壁ができて、外の  
事物にたいするリアルな感覚  
がなくなり、非常にさびしい  
孤立感に陥ったからである。

このような苦しみは現代人  
において多かれ少なかれもつ  
ている精神状態ではないかと  
思う。ただ私の場合は、この  
問題が先鋭化して現れてきた  
のだと思う。

この自己分離意識のいやし  
がたい問題は〈現代の重要な  
宗教問題〉であると言えるか  
もしれない。

幸い、私はお念仏の信心に  
よって、自己分離意識の壁に  
穴があいて、やっと世界をな  
んとかりアルに感じることが  
でき、寂寥感、孤立感**は解消**  
した。

宗教哲学者の西谷啓治先生  
もお若い時に似たような問題  
にぶつかられ、禅修行によつ  
てこの問題を克服されたよう  
である。西谷先生は八木誠一  
先生との対談の中で次のよう  
に言っておられる。

西谷「僕は、率直な感じとい  
うと、哲学をしていながら、  
自分の足が地についていない  
というような問題ね。それが  
だんだん強くなって、非常に  
苦痛になってきたわけです」

八木「これはとても大切な感  
覚だと思います」

西谷「やっぱり自分としては、  
しよっちゅうそれが問題にな  
る。ハエがね、ガラスにぶつ  
かって、出られない。あれに  
ちよつと似ているような感じ  
で、ガラスが一枚、間にある  
ということ」

八木「眼に見えない壁がある、  
それに隔てられている、とい  
うことが感じられてくる」

西谷「向こうがみんな見える  
んですね。だけど実際は、足  
が地についていないっていう  
ような感じ。どこか一番基本  
的な付け根のところね、ど  
こかこう、透明な境がある。  
境い目があるっていうのか  
な」

八木「どこか直接性が欠けて  
いる」

西谷「透明な、何と**言う**かな  
あ、隔た**り**があ**つて**、**答**えが  
や**っ**ぱり**答**えとして**あら**われ  
て**い**ない**よ**うな、**何**か**こ**う、  
そこ**に**行**け**ない**い**う**よ**うな

# 正信偈に学ぶ問答

## (二十一)

感じですかね。ガラス戸にぶつかって、騒いでいるハエのような感じ」

八木「参禅なさったのですか、そのとき」

西谷「それはもちろん、相国寺で。ただ参禅してるとね。ある意味では不思議といえませんが、不思議なようですけど、とれちゃった」(西谷・八木「直接経験」より)

西谷先生も、自他分離意識のよつて、リアルな現実世界から、切り離されて、足が地に着いていないような感覚に悩まれた。

このような問題は誰にでもある問題だと思う。ただそれが自己の上に自覚的な問題になってくるかこないかである。自覚的になり、ぬきさしならぬようになって、その解決を求めざるを得なくなる。そして、その問題が機縁となつて真実が開けてくるのである。

そういう意味で、この自他分離意識の問題をチャンスとして、自らの課題として取り組むことによって、真実にであうことができると思う。

(了)

### 普放無量無辺光

### 無碍無对光炎王

### 清浄歓喜智慧光

### 不断難思無称光

### 超日月光照塵刹

現代語訳(本願を成就された仏は、無量光・無辺光・無碍光・無对光・炎王光・清浄光・歓喜光・智慧光・不断光・難思光・無称光・超日月光とたたえられる光明を放つて、広くすべての国々を照らし、すべての衆生はその光明に照らされる)

\*

G「次に**不断難思無称光**の意味ですが、これは**不断光**・**難思光**・**無称光**という阿弥陀仏の光明の徳をあらわされたものですね。まず**不断光**とは」

D「寝てもさめても常に照らしてやまない光明の徳のことです。阿弥陀仏の光明はすべての生きとし生けるものの心を照らし続けてくださって

る。このことこそ、私たちの人生にとって、一番基礎的に大事なことですね。ここを無視して、私たちが自分の目的や願望を実現することだけで生きようとするため、いきづまってくるのですね」

G「どんな人も、どんな状態でも、人は仏心の光に照らされているのですね」

D「阿弥陀仏の光明は、あなたも太陽が昼も夜も地球を照らして、地球を温め、万物を養い育てているように、阿弥陀仏のお心は、私たちの心を寝ている時も起きている時も、幸せな時も不幸な時も、親しい人とともにいる時も孤独な時も、健康な時も病気の時も、私たちが知ろうが知らないが、うまずたゆまず私たちの心を照らし続け、はたらし続けてくださっているのです。しよう」

G「断絶することなく照らし続けられるというのは、本当に有難いことですね」

D「この世のもので、断絶し

ないものはありません。家族もいつまでも一緒ではありません。家も土地もお金もいつまでも続くものではありません。形あるものはいつかは絶えてしまいます。すべてはしばらくの間のことです。そんな中で、阿弥陀仏の光明は絶えることなく、はたらきづめにはたらきかけてくださっている、と釈尊は仰せられます」

G「不断光は私たちの生活にとって、具体的にどういうお徳とっていいのでしょうか」

D「私たちが真実に背いて、流転し続けてきた。そんな状態の私たちの心を照らし続けてくださることによって、やつと真実を求めようという願いが私たちに起こり、念仏聞法をするようになったのでしよう。それは阿弥陀仏の絶え間ない(調熟の光明)へお育ての光明のご恩によってなのだ、先人は教えてくださいます。私たちが光(真実)に心が向くようになってきたのは、仏心の光が照らし続けてくださっているからであり、それによってやつと仏法を求め芽がでてきたのであ

りましょう」

G「自分がすぐれているから仏法を求めようになったのではなく、仏光が照らし続けてくださる縁が熟して、やつと法に心が向くようになったのですね」

D「私の心の闇が深く苦しから、照らしてくださいさる心光のあたたかさが、知らず知らず、少しずつ少しずつ身に浸みってくるのではないのでしょうか。寒いと太陽の光が恋しいように。人生が不安で苦しから、私の心を照らしてくださいさるあたたかい仏心の光を慕うようになるのでしょうか。光が闇を照らしてくださいさるから、闇が闇と知らされ、闇を苦と感じるようになり、闇から出たいと願うようになるのでしよう。闇だけですと、闇しか知らないから、闇から出ようという自覚も起こらないのではないでしようか」

G「すでに照らしたもう光(お助け)のおかげで、助かりたいという真剣な願いが起るのですね」

D「ええそうですね。また不断光について聖人は

光明てらしてたえざれば  
不断光仏となづけたり

## 聞光力のゆえなれば 心不断にて往生す

とうたわれています」

G 「聞光力というのは、どういう意味ですか」

D 「ちよつと分かりにくい言葉ですが、さいわい聖人は左訓をされて、

## 弥陀の御ちかいを信じまいらするなり

と仰せられています。ですから光を聞くというのは（必ず助ける）という弥陀の誓いを信じることであり、聞光力とは本願を信じる信心の力のことです。信心のはたらきですね」

G 「そうすると

## 聞光力のゆえなれば

## 心不断にて往生す

とは」

D 「不断光のはたらきは私において不断の信心となつて、絶えることなく相續して、私の一生を貫いてくださる。信心の心が断えないから、それが私の心を浄土に生まれさせてくださるのであるとの思し召しでありましょう」

G 「もし、信心が私に恵まれても、信心が途中で絶えてなくなるなら、浄土の往生は実現しないのですね」

D 「ええ、不断光ましまして

信心が途切れることなく相續してくださるので、浄土の往生が成就するのであります。う」

G 「私たちが寝ていても起きていても、仏を思う時も忘れていても、怒っている時も平静な時も、平和な時も戦争の時も、信心は私を離れずに相續されて、私を導き、私を包んで、浄土に至らしめてくださるのですね。不断光仏のお徳の有り難さがよくわかりました。では、凡夫の心と届いた信心とはどういう関係にあるのでしょうか」

D 「仏心が届いて信心となつてくださるのですが、仏心は凡心を撰取して離れなくなるのです。撰取するのは仏心であり、撰取されるのは凡心です。撰取したもう主体であり、凡心は撰取される客体となりま

す。信心がない時は煩惱の凡心が私の主体、いわば自我が私の主となっていたのですから、信心が主体になるという

ことは自我の心（煩惱の心）は客体になるといいいいのではないのでしょうか」

G 「では信心がなくて、自我の心が主体ですと、それも相

続するのでしょうか。それとも死ねば相續せず断絶するのでしょうか」

D 「仏心にふれないと、自我が主体であるという迷い心も相續していくといわれています」

G 「迷い心が相續するというのは、この一生が終わっても、迷い心はなくならないということですね」

D 「ええ、そうなりますね。それを仏教ではサンサーラ、すなわち流転と説かれています」

G 「ただし、信心である仏心が主体ですと、仏心は凡心（煩惱・罪）を浄化し、迷い心が

仏心に転じられると、今度は仏心となって久遠に衆生救済のはたらきがなされていくと、教えられています」

さっています」

G 「迷い心が主体となつている場合は迷い心もお相續していくということですが、それは生まれて死ぬのを繰り返すということなのでしょうか」

D 「それいわれています。煩惱の心は、同時に一つの形態（肉体）として執着され、感

知されると説かれています。その肉体は死んでも、煩惱は相續し、又ある形（身）を感じ

取し、その縁が尽きると又その形は消えていきます。生まれて死ぬことの繰り返しとはそういうこととして説かれています」

G 「死後の相續性ということ

は、科学的な観察や計測によつては知られることではないと思ひますが、仏教ではどうしてその様に説かれるのでしょうか」

D 「それは仏や菩薩方の悟りの深い智慧によつて、存在の真相や心の深層領域を内観することによつて、感知されて

きたのであります。ですから外界の物質的な領域を科学的な観察や計測によつて知るといふ科学の知り方とは質

も方法も違います」

G 「現代の私たちは科学で知

られないものは空想だ、無いものだという考えが一般的になつていますね」

D 「ええ、現代は科学的な見方が主流となつていますから、観測や計測できないものは一切認めない、あるいは無いものだと思いますが、それは

独断でしょう。だいたい心というものは科学的な手法で知り得ません。へ楽しい悲しい」といふ感情すら科学的な

観測では知り得ないと思ひます。脳の神経細胞の活動を観測して、この部分の脳細胞

の活動が喜びを生み出している」と言つても、それはある観測者の心が意味づけたり推

測しているものであつて、真実であるという証拠はありません。観測者の判断による推測

や意味づけが変われば説明も変わります。実際、（脳が心を生み出している）という説

に賛同しない著名な脳科学者たちもいます」

G 「そうですか。要するに科学的手法ではない内観的智慧が感知して、生死流転ということが説かれてきたのですね」

D 「ええ、そう思います」

（了）

たのではなかるうか。瓜二つなら、私

# 信心夜話

太字が松並さんの言葉。

\*

○ 南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏

名から 声から 口元までも

私に目鼻を付けたような

所作までよく似て 瓜一つ

ほんにまあ ほんにまあ

南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏

ほんにまあ ほんにまあ

南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏

聞くに 聞くほど南無阿弥陀仏

(深い味わいの歌である。昔、日生という信心の厚い女性が、(南無阿弥陀仏は阿弥陀様なり、私なり)、と言われたのと重ねて味わうことができる。阿弥陀仏に摂取されるとは、阿弥陀仏がまことの自己になりたもう。今まで自我が私の主人公のようになっていたが、阿弥陀仏にであった時から、阿弥陀仏が自己自身になりたもうことが知られ始める。自我の私と阿弥陀仏の自己が共存する。しかし、阿弥陀仏が私の真実の主体で、自我の私は客体である、と知られ始めてくる。信心と信心とは一体になって離れない。そういう事態を(よく似て、瓜一つ)といわれ

と南無阿弥陀仏は別々になつてしまふが、二つでありながら一つ、一つでありながら二つ。日生信女は、南無阿弥陀仏は阿弥陀様でありながら、同時に私自身であると仰せられる。阿弥陀仏は自己になりたもうが、しかし(私は阿弥陀仏である)とは決していえない。私はどこまでも煩惱具足の凡夫である。だが、南無阿弥陀仏を聞くと、聞けば聞くほど、自己自身にまでなつてくださっている、と仰がれてくる)

陀仏と、二つにしている、別々にしている。すぐ薬をのめばよいのに、いやと言うてなかなか飲まぬ。それを親は、無理に口を開けて、薬を飲ませて病気を治す。その、薬を飲まされている姿が念仏称えさされている、聞いている、呼んでくださっている姿であります。それを歌に「無理な願に頼まれて 計らいはなれて随うばかり 憑む心も南無阿弥陀仏」とあります。重ねて申しますが、この世の医者は、薬と医者と二つある。医者は病名を知るだけで、病気は薬が治す。二つある。南無阿弥陀仏は、阿弥陀様の医者と妙薬と、一つに成った。医者が南無阿弥陀仏とゆう妙薬に成った。一つであります。「いつも六字と 二人が一人 南無阿弥陀仏」

(阿弥陀仏とは無量の智慧と慈悲のはたらき。その無量無限なるものが、有限で極小の私(人)にいかにして接触し、交わるか。阿弥陀仏は南無阿弥陀仏という名号(真実の言葉)となつて、私にかかわりたもう。私が私の方から無限者に接しようとする、茫漠として、まどうばかりである。しかるに、無量なる慈悲は、大悲の心深きゆえ、ご自身を南無阿弥陀仏のみ言葉にまで身を縮めて、一匹の虫に等しい私にご自身を現したもう。実に不思議なことである。南無阿弥陀仏の名号は限定した形でありつつ同時に無限な徳そのもの。私は阿弥陀仏に救われるのでもなく、また単に大いなる慈悲に救われるのではなく、仏の慈悲が南無阿弥陀仏にまでなられた、その真言に救われるのである。南無阿弥陀仏は実に我らが口に行ぜられ、我らが耳に(ナムアマミダブツ)と聞こえたもう。この御名に救われるのである。口に称え現れたもう南無阿弥陀仏が阿弥陀様ご自身。それは一生聞いても聞いても、いただきつくせぬまこと。それなのに一声のお念仏をなんと粗末に聞いてきたことか、聞いていることか)

(了)

《念佛寺報恩講》

十二月二十二日(火) 午後二時始まり

講師 大阪・浄永寺住職 矢幡和男師